新撰改修集

（解読文）

小林芳規解読

古典文庫

秋擣詩集

小林芳規解読

古典文庫

古典文庫第一九七冊

昭和三十八年十二月二十日　印刷発行　©　（非売品）

新撰朗詠集
文
解読

解読者　小林芳規

編集兼発行者　吉田幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者　帝都印刷製本株式会社

発行所　東京都（王子局区内）北区西ケ原町三ノ三四　古典文庫

電（九一九）二七一七

振替口座東京一四五九七番

梅沢本

新撰朗詠集　解読文

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

凡　例

一、漢詩句の訓読文について

この訓読文は、原文の漢文をそれに加えられている朱筆および墨筆のヲコト点と仮名とに従つて訓下したものである。

1　表記上の約束は次に拠る。

イ、ヲコト点は訓読文では平仮名で表わした。

ロ、仮名の訓は訓読文では片仮名で表わした。

ハ、原文にヲコト点・仮名がなく私に推読した語は、平仮名を6号活字で小さくして示した。但し、傍訓で推読の語は片仮名を括弧に包んで示した。推読の態度については「梅沢本新撰朗詠集の訓読語について」(注)を参照されたい。

ニ、原文の字間「・」のは読点「、」で、右下の点は句点「。」で示した。そ

れらのあるべき所にこれを欠く際は、適宜四分空とした。

ホ、訓読文中、〔　〕の中の漢字は、原文にはあるが、訓読としては読まない文字である。

ヘ、再読字の二度目の訓は、漢字を《　》で包んで示した。

ト、〔　〕の仮名は仮名点とヲコト点との重複する場合、又は別訓の存する場合の第二の訓を示す。

チ、原文の朱筆の仮名は「……朱」として示した。

リ、原文の合点は※印で示した。

ヌ、音合符（二字以上の熟字が音読であることを示す符号。□-□）と訓合符（二字以上の熟字が訓読であることを示す符号。□,□）とはそのまま示した。一字の音読符・訓読符はその漢字の右傍に「音」または「訓」として示した。

例　新たに↓新たに（訓）　転スルを↓転スルを（音）

ル、漢字に付せられた四声点（濁点もあり）は、朗詠のための本資料としては

大切なものであるから圏発をつけた。

ヲ、返読を示す「一・二」「レ」等の符号は印刷の都合上省いた。（複製参照）

ワ、ヲコト点の「り」（平仮名）は「より」「なり」「たり」の場合だけであるので通行体に従つた。

2　訓読文には濁点は一切用いなかつた。

3　漢字の字体は現行通用体に改めたものがある。原字体は複製を参照されたい。

二、和歌の飜刻について

1　原本の漢字、仮名の別はもとのままに従つた。宛字等の漢字には、右傍にルビ式に、その表わす語を私に平仮名で示した。

2　活用語尾や助詞等を欠く際にも、表記されないその語を、平仮名6号活字で小さく示し、本文中に入れて読み易さの便をはかつた。

3　仮名遣は、原本のままとした。

4　濁点は一切用いなかつた。

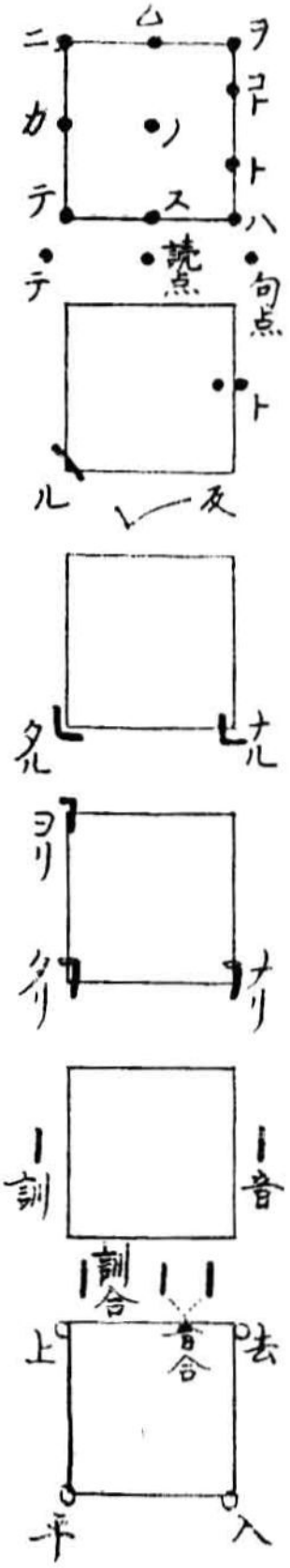
三、漢詩句・和歌の解読に共通する事項

1　原本の各行の行頭字には「を付し、原本の行数を各行の上に示した。

2　原本の丁数は、省いた。

3　詩句・和歌の排列が寛永板と異なるものがあるが、原本に従つた。

〔付〕本書所用のヲコト点は左の如く帰納される。（紀伝点）



本資料の調査、解読の機に恵まれたのは、松田武夫・吉田幸一両博士の御配慮によるものである。記して御芳情に深謝申上げる。

（注）本書の訓読語については、拙稿「梅沢本新撰朗詠集の訓読語について」（訓点語と訓点資料二十六輯）を参照されたい。

一「新撰朗詠集上

二「春

三「立春　早春　春興

四「春夜　子日　若菜

五「三月三日付桃暮春　三月尽

六「潤三月　鶯　霞

七「雨　梅付紅梅　柳

八「花付落花　躑躅　歎冬

九「藤　詩八十六首　哥四十七首

一〇 「夏
一一 「更衣 首夏 夏夜
一二 「端午 納涼 晩夏
一三 「花橘 蓮 郭公
一四 「蛍 蟬 詩二十八首 哥廿首
一五 「秋
一六 「立秋 早秋 七夕
一七 「秋興 秋晩 十五夜付月
一八 「九日付菊 九月尽 女郎ママ
一九 「萩 蘭 槿

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

二〇 「前栽　紅葉付落葉　鷹付帰鴈

二一 「虫　鹿　露

二二 「霧　擣衣　詩百三首　哥四十五首

二三 「冬

二四 「初冬　冬夜　歳暮

二五 「炉火　霜　雪

二六 「氷付春氷　霰　仏名付除夜

二七 「詩廿六首　哥十三首　已上　詩二百四十三首　哥百廿五首

二八 「春

二九 「立春

三〇 「浅ー深 何れの水か氷 猶 結ヘル、高卑 山の雪 消ぇ不ること無シ 立春十二月十九日 菅家後集

三一 「浮ー雲は自(コレヨリノチ) 後 寒ぅシテ暖かナル応し 壮ー日は如ー今 去て帰ら不 立春廿六日 菅

三二 「年の内に春立っ事を春日野の若菜さへにも知りにける哉 貫之

三三 「春は跡 無うして至る 争てか尋ねー得む 老は身を趣めて来たる亦、避りー難し 立春日 藤篤茂

三四 「春霞たてるを見れは荒玉の年は山より超ゆる成りけり 紀文

三五　「早春

三六　「林外に雪　消えて山の色　静かなり　窓の前に春　浅シて竹の
　　声　寒シ　韋振

三七　之を〔於〕深水に「及せは則ち、文漪（イ）。動いて紫鱗　騰（アカ）ル。
　　之を幽「溪ニ着（朱ツ）クレは、則ち彩雲　暖かにシ（朱テ）而黄鶯　出っ
　　陽春詞
　　都良香

三九　「煙　村巷に生って遥かに柳を知る、雪　墻陰に積て暗に梅を
　　弁ふ　巡於山野物安興

四〇　酔は「不は争てか辞せむ、温樹の下　建春門の外、雪、春を

埋む　元日宴　善相公

四一　「巌ー松に雪　宿て山ー北を暗(ソラ)にす　岸ー草　煙　濃かにして水ー東を識る　早春在列

四三　「三嶋江に角組(つのくみ)渡る蘆の根の一夜の程に春めきにけり　曽禰好忠

四三　「み吉野は春之気色に霞め　鞆(とも)結ほれたる雪の下草　紫式部

四四　「逢坂の関をや春も超え　津覽(つらむ)音羽の山のけさは霞める　俊綱

四五　「春興

四六　「緑ー油、葉を剪て蒲訓　新訓たに長セリ、紅ー蠟(ラフ)。枝に黏(ネ)ェて杏　開かむと欲(す)　遊城東白

四七　「秦ー城の楼ー閣は鶯ー花の裏(ナ)(か)　漢ー主の山ー河は錦ー繡の中　清明日杜甫

四八 「銅街陌の柳は条々翠なり　金谷園の花は片々燃えたり　遊宿洛中　張野人

四九 「居ること常の座無し、苔を掃て〔而〕暫く莚に代ふ、至ること定れる「家無し、花を尋ねて〔而〕主を問は不　逐処花皆好　紀斉名

五一 「中殿の曙香は吹に従て染ミ　上陽の春の色は煙に陶セ被レたり　陽春詞　良香

五二 「万事老来イて皆不敏ナレトモ、唯花鳥に因て聡明作り　花鳥田

五三 「衰鬢は山陰の多くの歳の雪　浮栄は花の下の一時の春　暮春述懐　藤知房

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com